

日本大学理工学部

# 一般教育教室彙報

第 116 号

---

## 目 次

### — 論 文 —

テキスト分析における『楽園の喪失』の「創世記」からの影響—動詞“say”を中心として—  
.....加藤 遼子..... 1

---

2025 年 4 月

# テキスト分析における『楽園の喪失』の「創世記」からの影響—動詞“say”を中心として—

加藤 遼子

(令和7年1月17日受理)

Use of Text Analysis Method to Detect the Influences of Genesis in *Paradise Lost* : Focusing on a Verb “Say”

By Ryoko KATO

(Accepted January 17, 2025)

## 第1章 はじめに

ジョン・ミルトン (John Milton ; 1608-74) が『楽園の喪失』(原題 : *Paradise Lost*) を口述筆記する際に、欽定訳聖書の旧約聖書「創世記」第1章～第3章から着想を得たことは多くの研究者が指摘してきたが、本論では、『楽園の喪失』<sup>(1)</sup> をテキスト・データとして客観的に分析し、作品における「創世記」<sup>(2)</sup> からの影響関係を、特に動詞を中心に、考察するものとする。<sup>(3)</sup>

本論では、テキスト分析の手法を用いることで、定量的なアプローチから「創世記」と『楽園の喪失』の影響関係を探ることができると考える。使用する KH Coder<sup>(4)</sup> は、テキスト・データから作中で使用されている語の数、そしてその共起性等を計ることが可能な分析ソフトウェアである。今までのミルトン作品研究の多くは、定性的なアプローチである歴史的、宗教的な面等から多く論じられてきたが、定量的なデータから作品を考察することは客観的で新たな作品考察を行うことが可能である。ミルトン作品のテキスト分析を中心とした研究としては、1982年にコーンズが、テキスト分析ソフトウェア COCA を使用し、『ミルトンの散文の発展』を発表し、その後オックスフォード・コンコーダンス・プログラムや独自の FORTRAN プログラムを使用し、『ミルトンの言語』を1990年に出版している。さらに、2018年に、キュレルとイッサは『デジタル・ミルトン』内でミルトン作品をデジタルな視点から論じ、近代の散文作品からメタデータを処理したり、現代に使用されている様々なデジタル媒体からミルトン作品の一端を見出したり、ミルトン作品の後世への影響を論じた。続けて、2021年にクアメンは、論文 “Stylometry without Words: Analyzing John Milton’s Grammatical Style” を発表し、計量文献学を中心とした視点で、ミルトン作

品を分析している。このように海外の研究者の中には、ミルトンの作品のテキスト・データを分析している論も見られるが、その数はあまり多くないのが現状である。

今までミルトン研究や多くの英文学研究において、テキストそのものに焦点を当てる際には、ミルトン作品の文法を中心、または前世代・同世代の作家からの影響や後世への影響を中心に論じられていたが、本論では、ミルトン作品の「単語そのもの」に着目し、ミルトンが執筆する際に参考にした欽定訳聖書「創世記」との比較を進めていく。定性的なアプローチで論ずることは、論者により解釈が左右される場合があるが、テキスト分析は、これまでの文学研究にはない客観的で定量的な視点から作品を見ることが可能だと考える。

## 第2章 欽定訳聖書「創世記」と『樂園の喪失』の「動詞」の比較

ミルトンが作品執筆の際に、参照し、引用した聖書の中で大きな影響力を持っていた聖書として、1611年にジェームズ一世の命により編纂された欽定訳聖書 King James Version Bible (通称 KJV) が挙げられる。勿論、ミルトンの作品内には、欽定訳聖書のみならず、JT版と呼ばれるフランシスカス・ジュリウスとイマヌエル・トレメリウスによるラテン語訳旧約聖書からの引用、ヘブライ語やギリシャ語などの原語の聖書からの引用もみられる。<sup>5)</sup> ミルトンは作品内に、聖書からの影響をどのように表現しているかについては、今まで様々な学者が研究をしている。例えば、シュワルツは、ミルトンが自分自身の想像力、詩的、政治的、神学的な意図を作品内に入れるために、聖書のテキストの権威を利用していると指摘している。また、テスキーは、ミルトンが神と人間の関係性など、自由で独創的な聖書解釈を『樂園の喪失』に込めていることを指摘し、聖書を政治的目的で読んでいるのではないかと指摘している。このように、従来ミルトンが聖書のテキストを作品内に取り入れる際には、彼の思想、政治的な主張が含意されていると指摘されてきたが、本論では、聖書の中でもとりわけ「創世記」と『樂園の喪失』のテキスト・データの分析することにより、両作品の関係性を明らかにしていくことを目的とする。

本論では、ミルトン時代に使用されていた、綴りなどが修正される前の1611年版欽定訳聖書の「創世記」第1章から第3章のみをテキスト・データとして使用し、比較の対象とする。分析ツール KH Coder により、どのような語が多用され、「創世記」が『樂園の喪失』にどのような影響を与えているのか、その関連性を読み解くこととする。なお、「創世記」第1章から第3章と、『樂園の喪失』の全文章の総数には差があるため、比較の際には、全文章数における割合も視野に入れ考察する。

以下の〔表1〕は1611年版「創世記」第1章から第3章の中で、使用されている語を頻出順に並べた表である。ページの都合上、頻出語20番目までを提示する。

右記 [表 1] によれば、「創世記」の中で一番頻出している語は **be** である。この項目 **be** には, **is, are** という語形変化や, **was, been** という時制変化もすべて含まれている。「創世記」の全 80 節の中で, **be** が 79 回使用されている点は着目に値すべき点であろう。また, 固有名詞 **God** や **LORD** が多く登場している点は, 「創世記」第 1 章から第 3 章が神による天地創造, そして人類の創造と楽園からの追放を中心としており, 多くの文が **God** を主語にとる文で構成されているからである。**God** を主語とした文を含む節は, 全 80 節中 46 節あり, 半数以上に含まれていることがわかる。その他, 主語としては, **the earth, the waters** といった自然的存在から, **the man, the woman** といったアダムとイヴが挙げられるが, それぞれの主語から始まる文は数行のみであり, 「創世記」の文章の多くが神の御業と人間への助言に焦点が当てられている。

次に、『楽園の喪失』の頻出語句に着目する。「創世記」から着想を得て, ミルトンが 1667 年に『楽園の喪失』を初めて発表した時点では, 全 10 巻で構成されていた。その 7 年後に出版された 12 巻版では, 後の版になると, 詩の前に **Argument** が挿入されるようになる。本論では 1674 年発表の全 12 巻版の **Argument** をのぞいた詩部分のみをテキスト・データとして使用する。以下は、『楽園の喪失』の頻出単語の一覧である。

右記 [表 2] から見て取れるように, 「創世記」では主語として **God** が多用され, **God** が頻出リストの上位にあったのに対し, 『楽園の喪失』では, **he, she, they, we** といった代名詞が多用されており, **God** は 17 番目にまで頻度が下がる。アダムやサタン等の男性登場人物を指し, 一番多用されている **he** は 2076 回登場し, イヴや<罪>などの女性登場人物のみならず, 自然に対しても使用されている **she** は 421 回登場している。神の御業を中心としている「創世記」に対し, 『楽園の喪失』では, 神以外の登場人物も作中に多く登場し, 文の主体となっていることが窺える。ミルトンは「創世記」の神を中心とした視点から,

[表 1] 「創世記」における頻出語一覧

| #  | 抽出語    | 品詞/活用      | 頻度 |
|----|--------|------------|----|
| 1  | be     | Verb       | 79 |
| 2  | God    | ProperNoun | 58 |
| 3  | he     | PRP        | 47 |
| 4  | it     | PRP        | 39 |
| 5  | say    | Verb       | 30 |
| 6  | earth  | Noun       | 24 |
| 7  | they   | PRP        | 22 |
| 8  | LORD   | ProperNoun | 20 |
| 9  | tree   | Noun       | 20 |
| 10 | make   | Verb       | 17 |
| 11 | man    | Noun       | 17 |
| 12 | day    | Noun       | 16 |
| 13 | eate   | Verb       | 16 |
| 14 | good   | Adj        | 15 |
| 15 | I      | PRP        | 15 |
| 16 | which  | W          | 15 |
| 17 | let    | Verb       | 14 |
| 18 | garden | Noun       | 13 |
| 19 | euery  | Noun       | 12 |
| 20 | Adam   | ProperNoun | 11 |

[表 2] 『楽園の喪失』における頻出語一覧

| #  | 抽出語    | 品詞/活用      | 頻度   |
|----|--------|------------|------|
| 1  | he     | PRP        | 2076 |
| 2  | they   | PRP        | 1195 |
| 3  | be     | Verb       | 1011 |
| 4  | I      | PRP        | 878  |
| 5  | not    | Adv        | 647  |
| 6  | we     | PRP        | 647  |
| 7  | so     | Adv        | 427  |
| 8  | she    | PRP        | 421  |
| 9  | Heaven | ProperNoun | 396  |
| 10 | what   | W          | 393  |
| 11 | have   | Verb       | 351  |
| 12 | now    | Adv        | 325  |
| 13 | thus   | Adv        | 319  |
| 14 | which  | W          | 310  |
| 15 | who    | W          | 293  |
| 16 | my     | PRP        | 259  |
| 17 | God    | ProperNoun | 254  |
| 18 | thy    | Noun       | 251  |
| 19 | then   | Adv        | 234  |
| 20 | man    | Noun       | 223  |

神を中心としながらもその創造物である人類、天使、悪魔などのその他の登場人物の動作や視点も多く取り入れたのである。

『楽園の喪失』が「創世記」を軸として据えながら、神以外の登場人物（または自然描写）を主語とし、その行動や感情、思考を取り入れたことを踏まえ、本論では作品中「動詞」に着目をし、その影響関係を見ていくこととする。以下の〔表3〕は「創世記」の頻出語句の中で動詞に焦点を当てた一覧である。

先ほども述べたように、動詞として一番頻出している語は *be* であり、それ以降、多くの動作主を *God* とした動詞が続く。動詞は全体で 352 回登場するが、*be* の割合は約 22.4% にも及ぶ。人間の墮落の原因となる禁断の果実を「食べる」場面が登場するため、*eate* (*eat* の旧綴り) という動詞が多く登場するが、この割合は 4.5% にしかすぎず、*be* の頻出度の高さが窺える。

〔表4〕は『楽園の喪失』の動詞の頻出度を抽出した表であるが、一番頻出する動詞は「創世記」と同じ *be* であり、その登場回数は 1011 回にも及ぶ。これは全体で 12141 回登場する動詞の割合の約 8.3% にも及び、「創世記」と比較すると、作品内において、*be* の登場割合は約 3 分の 1 以下にまで減少する。さらに、『楽園の喪失』では、*be* 以外の動詞で、人間（または天使・悪魔）の行動・動作を表す単語が多く登場していることもこの表から伺うことができる。例えば、*find*「見つける」*know*「知る」*stand*「立つ」

という動詞は人間が行う動作であり、神の御業を中心とした「創世記」よりも、その他の登場人物の行動を描写した文章が多く登場する。さらに、『楽園の喪失』には多くの知覚動詞が使われていることが窺え、例えば、*see*「見る」、*hear*「聞く」などは、知覚動詞の代表格であり、登場人物がその時に何を見て、何を聞いているのかに焦点をあてることにより、読者に状況を鮮明に想像させる効果がある。このことは、神の御業をナレーション形式で紹介する「創世記」よりも、1952 年頃<sup>(6)</sup>に失明していたミルトンが、『楽園の喪失』

〔表3〕「創世記」における頻出動詞一覧

| #  | 抽出語           | 品詞/活用 | 頻度 |
|----|---------------|-------|----|
| 1  | <i>be</i>     | Verb  | 79 |
| 2  | <i>say</i>    | Verb  | 30 |
| 3  | <i>make</i>   | Verb  | 17 |
| 4  | <i>eate</i>   | Verb  | 16 |
| 5  | <i>let</i>    | Verb  | 14 |
| 6  | <i>call</i>   | Verb  | 10 |
| 7  | <i>bring</i>  | Verb  | 9  |
| 8  | <i>have</i>   | Verb  | 8  |
| 9  | <i>see</i>    | Verb  | 8  |
| 10 | <i>create</i> | Verb  | 7  |
| 11 | <i>do</i>     | Verb  | 7  |
| 12 | <i>ouer</i>   | Verb  | 5  |
| 13 | <i>take</i>   | Verb  | 5  |
| 14 | <i>thou</i>   | Verb  | 5  |
| 15 | <i>diuide</i> | Verb  | 4  |

〔表4〕『楽園の喪失』における頻出動詞一覧

| #  | 抽出語          | 品詞/活用 | 頻度   |
|----|--------------|-------|------|
| 1  | <i>be</i>    | Verb  | 1011 |
| 2  | <i>have</i>  | Verb  | 351  |
| 3  | <i>find</i>  | Verb  | 147  |
| 4  | <i>know</i>  | Verb  | 147  |
| 5  | <i>see</i>   | Verb  | 146  |
| 6  | <i>stand</i> | Verb  | 129  |
| 7  | <i>come</i>  | Verb  | 120  |
| 8  | <i>seem</i>  | Verb  | 107  |
| 9  | <i>make</i>  | Verb  | 100  |
| 10 | <i>do</i>    | Verb  | 94   |
| 11 | <i>bring</i> | Verb  | 91   |
| 12 | <i>let</i>   | Verb  | 90   |
| 13 | <i>say</i>   | Verb  | 87   |
| 14 | <i>fall</i>  | Verb  | 86   |
| 15 | <i>hear</i>  | Verb  | 86   |

に読者の感覚に訴える文章を描いていることが想像できる。

それに対し、「創世記」の頻出動詞リストでは、2番目に多い8.5%の割合で登場していた、sayが『楽園の喪失』では、13番目まで頻度は下がり、全体で87回、つまり0.7%の割合にまで留まる。この要因として、創世記は神、そして神の御業と人間への助言を中心に語られているのに対し、『楽園の喪失』の場合、様々な登場人物の、様々な行動が描かれているため、神からの言葉以上にそれら登場人物の行動の描写回数が多いと推測する。

### 第3章 「創世記」と『楽園の喪失』のsayの動作主の比較

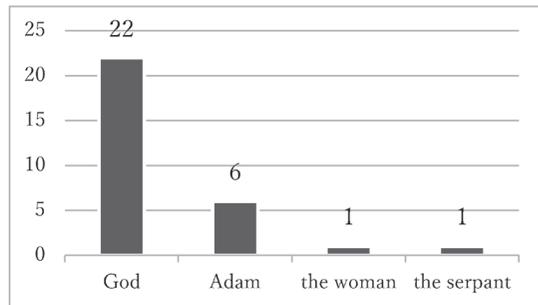
先述したように、「創世記」では2番目に頻出している動詞sayは、『楽園の喪失』では頻出度として13番目まで下がる。本章では、動詞sayに着目し、動作主は誰なのか分析を行い、両作品の比較を行う。「創世記」の形式は、先述したように「<主語>が～と言った(仰った。)」というナレーション形式をとっているため、必然的にsayという語の登場は多くなる。以下は、「創世記」での動詞sayの動作主をまとめた表である。

作中で30回登場する中でsayは、22回Godと共に起されており、全体の73%にあたる割合である。動作主を見つける際には、

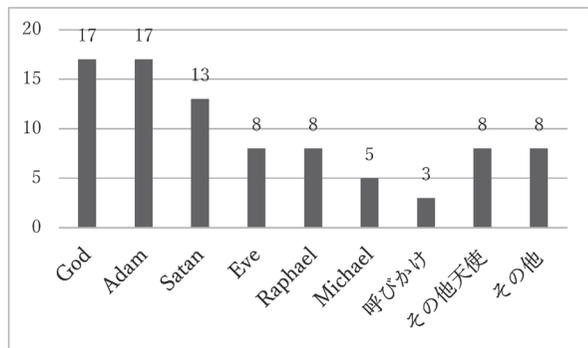
「創世記」は一文が短く、すぐに動詞の主語を見つけることが可能である。それに対し、『楽園の喪失』は、「創世記」に対し、文章のまとまりが大きく、動作主が動詞から遠く離れていたり、または代名詞で書かれていたりするため、固有名詞にたどり着くまでに時間がかかる。実際、対象の動詞の前後数十語を表示できる機能がKH Coderにあるが、その範囲にも表示されず、原文に戻り、動作主を探す必要があるケースも多くあった。以下は『楽園の喪失』に描かれたsayの動作主の表である。

右記の表を比較すると、「創世記」に対し、『楽園の喪失』では様々な登場人物が自ら発言する機会を得ており、各々が自分の意見を述べる様子が表現されていることがわかる。以下は、『楽園の喪失』において、アダ

[表5] 「創世記」におけるsayの動作主(全30回)



[表6] 『楽園の喪失』におけるsayの動作主(全87回)



ムの発言に対する神の言葉である。

Thus far to try thee, Adam, I was pleased,  
 And find thee knowing not of beasts alone,  
 Which thou hast rightly named, but of thy self,  
Expressing well the spirit within thee free,  
 My image, not imparted to the brute,  
 Whose fellowship therefore unmeet for thee  
 Good reason was thou freely shouldst dislike,  
And be so minded still;… (PL, Book XIII, 437-43 ; 下線は論者による。)

アダムが自らの内なる霊 (the spirit within thee) を表したことに對し、神は歎喜し、今後ともそのことを繼續してほしいと言う場面である。このことから『樂園の喪失』内では、神に自分の意見・希望を伝えることができる存在として描かれ、何かを言う (say) ことができるのは、神だけの特権ではなく、他の登場人物にも与えられている権利であることを示している。このことは、ミルトンが 1643 年の政府による印刷規制条例である、出版物の検閲について反対した『言論・出版の自由』(Areopagitica) の主張に通ずるものがある。ミルトンは、イングランドは眞実と理解に對して開かれているべきであると主張し、政府の基準によって独占されるべきではないと考えた。出版物の検閲を認めることは、他者を黙らせる力を持つことであり、人類がまだ知らない眞実を見つけることを妨害し、神の計画を妨げる可能性があると考えていた。<sup>(7)</sup> つまり、ミルトンは自らの意見を言う (say) ことこそが、人類が神の計画の一端を知ることを手助けになると考えていたと推測できる。

しかし、ミルトンは「言う」ことだけを『樂園の喪失』に描いたのではない。以下は、『樂園の創造』でアダムが神にイヴの創造を願う場面である。

Let not my words offend thee, heavenly power,  
 My maker, be propitious while I speak.  
 Hast thou not made me here thy substitute,  
 And these inferior far beneath me set?  
 Among unequals what society  
 Can sort, what harmony or true delight?  
 Which must be mutual, in proportion due  
 Given and received; but in disparity  
 The one intense, the other still remiss  
 Cannot well suite with either, but soon prove  
 Tedious alike: Of fellowship I speak

Such as I seek, fit to participate  
 All rational delight, wherein the brute  
 Cannot be human consort; … (PL, BookVIII, 379-91)

それに対し、以下は、「創世記」のイヴの創造場面である。

And the LORD God said, It is not good that the man should be alone:  
 I will make him an helpe meet for him. (Genesis 2:18)

「創世記」では、「人間が一人であることは良くないことである、そのため、助け手を創造する」という文言のみであり、そこに『楽園の喪失』のアダムが希望するような「対等な立場で、語りだせる存在」という意志はなく、そもそもアダムが神に願う状況は書かれておらず、神の意志により、アダムの伴侶を創造する流れとなっている。アダムとイヴの対等な立場での対話は、*society*「交わり」の意味を強く持つものとされふたりの対話は、対等な立場での愛、喜びの共有と、お互い欠けている部分を補い合う助けをもった、相互精神的に交わった関係性となっている。<sup>(8)</sup> その相互的な交わりこそが結婚の本質である、というミルトンの結婚観が作中に表れているのである。<sup>(9)</sup> 『楽園の喪失』と「創世記」の一番の違いは、作中におけるアダムとイヴの会話であり、二人がお互いに対等な、理性的な存在としての夫婦像を描いているのである。しかし、今回の分析でそのような相互的に話し合う *talk*, *converse* といった動詞はリストの上位には上がっていない。データ分析をする際に気を付けなくてはならないことは、登場回数が少ないからと言って重要度が低いと見なしてはならないことである。語の登場数と重要度の関係性を読み解くことはデータ分析のみでは困難であり、本文に戻り精読をする必要がある。

「創世記」において、主語 *God* と共起されることが殆どであった動詞 *say* は、『楽園の喪失』においては、*God* 以外の登場人物たちの動作としても描かれ、ミルトン自身が『言論・出版の自由』で訴えたように、誰もが統制されることなく、自分の意見・意思を表明することのできる世界が『楽園の喪失』に描かれているのだと推測できる。このことこそが、神の計画を知ることのできる方法である。また、一方的な発言だけではなく、対等な立場での相互的な会話を作中で重要視していたことに関しては、語の頻出数データのみではその重要性は確認できず、データ分析の課題と言えるであろう。

#### 第4章 結論

本論では、分析ツールである *KH Coder* を用い、従来行われていた定性的なアプローチではなく、定量的な観点から作品を分析することにより、「創世記」と『楽園の喪失』の影響関係を、客観的に考察することを目的とした。今回、作中に登場する動詞の頻出リス

トにより、「創世記」を主軸としながらも、ミルトンが「言う」(say)という動作が、『楽園の喪失』における登場人物たちにも与えられた権利であり、『言論・出版の自由』のミルトンの主張につながるものを見ることができないのではないだろうか。しかし、ミルトンが重要視した「対話」の部分に関しては、データ分析では見て取ることができず、本文の精読がまだ必要である。

また、今回焦点を当てた動詞に関し、誰が動作主なのか考察する場合には、データ上ではその区別をつけることができず、原文を再度参照し判断する必要があった。それは、代名詞が多用されており、その周辺箇所だけ見ても、その代名詞が誰(何)を指しているのか不明瞭であるからだ。さらに、ミルトン作品にみられる王政復古期の初期近代英語を分析するにあたっては、文法の違いおよび綴りの違いなど考慮しなくてはならない点が多くある。そのため、定量的なアプローチのみでは、精微な文学研究をすることは難しく、やはり従来の定性的な面からの考察も不可欠である。

しかし、「創世記」と『楽園の喪失』の関係性をテキストそのものに焦点を当て、分析することは、文学研究の根幹となることであることから、今後も、他の動詞や品詞を分析する定量的な面と、定性的な面の両方を用いることで、新たな文学研究が可能になると考える。

## 註

- (1) 本論のテキスト・データとしては、ファウラー編纂の『楽園の喪失』を使用する。
- (2) 本論で「創世記」と記した場合、これ以後は欽定訳聖書の旧約聖書「創世記」第1章から第3章を示しているものとする。
- (3) 本論では既存研究として、令和6年度発行の「英文学研究におけるテキスト・データ分析の現状と問題点—ジョン・ミルトンの『楽園の喪失』を中心に—」(『国際文化表現研究 *Expressions*』第11号〔国際文化表現学会〕)の一部データを用いて考察を進める。
- (4) 本論ではKH CoderのMaster Editionを使用している。
- (5) ミルトンは欽定訳聖書をすべて受け入れていたわけではなく、その内容の一部には批判的な考えを持っていた。
- (6) ミルトンが失明した年について『英国国民のための弁護』を1651年2月に発表後の1651年とするか1652年とするか定かではないが、本論では一般的に考えられる1652年とした。(宮西20)
- (7) ミルトンは、神は、自ら考え判断する理性、自由意志、良心を与えたため、出版物の内容や考えは、検閲され弾圧されるものではなく、読者自身の選択によって拒否されるべきと考え、どのような言論も許されるべきだと考えていたわけではない。
- (8) 杉本、20-21頁。
- (9) この結婚観は非常にピューリタンの考えであるが、ミルトンは性格の不一致による離婚も認めるべきであるというその当時は革新的な立場を示した。

## 引証文献

- Cunningham, Richard and Harvey Quamen, “Digital Approaches to John Milton.” *Renaissance and Reformation* Vol. 44, No. 3 *SPECIAL ISSUE*. Iter Press, 2021. pp. 9-23.
- Currell, David and Islam Issa, eds. *Digital Milton*. Palgrave Macmillan, 2018.
- Davies, Oliver Davis. *Milton's Socratic Rationalism: The Conversations of Adam and Eve in Paradise Lost*, Politics, Literature, & Film, 2017.
- Milton, John. *Paradise Lost*. Ed. Alaster Fowler. 2nd ed. Longman, 2007.
- . *Areopagitica and Other Prose Works*. Ed. C.E. Vaughan. Dover. 2012.
- Schwartz, Regina M. Schwartz. ‘Milton on the Bible,’ *A New Companion to Milton* 1st edition, Ed. Thomas N. Corns. Wiley-Blackwell, 2015.
- Teskey, Gordon. ‘The Bible and John Milton’s *Paradise Lost*,’ *The Cambridge Companion to the Bible and Literature*. Ed. Calum Carmichael. Cambridge UP, 2020.
- 新井明『ミルトン』中協出版, 1979年.
- .『ミルトン研究』有限会社リトン, 2018年.
- 杉本誠「ミルトンの結婚観と聖書」『城西大学女子短期大学部紀要』第12巻第1号, 城西大学女子短期大学部紀要編集委員会, 1995年. pp.19-28.
- ミルトン, ジョン.『言論・出版の自由』原田純訳, 岩波書店, 2008年.
- .『楽園の喪失』新井明訳, 大修館書店, 1978年.
- 宮西光雄「ミルトンの失明をめぐる問題」『英文学評論』第10巻, 京都大学教養部英語教室, 1962年. pp.19-81.
- 野呂有子『詩篇翻訳から「楽園の喪失」へ—出エジプトの主題を中心として—』富山房インターナショナル, 2015年.

### 編集規定

1. 本誌は、日本大学理工学部一般教育教室の機関誌であり、その目的を本学部と短期大学部（船橋校舎）に所属する教員の学術研究発表とする。
2. 本誌の発行は、年度内2回とする。
3. 本誌には、論文、研究ノート、依頼論文および研究動向の各欄を設ける。
4. 論文・研究ノートは査読制とする。
5. 掲載は編集委員会の決定による。
6. 彙報に掲載された論文・研究ノートは、本教室のウェブサイト上において公開する。

### 投稿規定

1. 投稿者の1人は、原則として本学部と短期大学部（船橋校舎）に所属する専任教員（特任教授を含む）とする。ただし、編集委員会が特別に許可した者は投稿を認めることができる。
2. 投稿する論文等はいずれも他に未発表のものに限る。ただし、口頭発表およびその配布資料はこの限りではない。
3. 投稿は1人1編とする。
4. 掲載決定後の加筆、訂正は原則として認めない。
5. 投稿者は、編集委員会に①投稿原稿（英文の題目・氏名を付けたもの）、②邦文要旨（600字以内）、③投稿者連絡票を提出する。  
注. 原則として電子ファイルで提出すること。
6. 原稿は下記の執筆要領に従うこと。

### 執筆要領

1. 原稿は、A4用紙を用い、原則として横書きとする。
2. 本文・図・表・注・引用文献を含めて、下記のレイアウトで10ページ以内とする。
3. 和文一段組 1ページ 1行40字×36行、1文字10.5ポイントとする。  
二段組 1行19字×36行×2段、1文字10.5ポイントとする。
4. 欧文 本文が横15センチ×縦20センチ、1行16ポイント、1文字10.5ポイントとする。
5. 図・表は、論文原稿末尾に貼り付け、本文中に挿入箇所を指定する。
6. 注および引用文献の表示は下記の通りとする。
  - (1) 引用文献は通し番号をつけ本文の後にまとめて記載する。  
本文中の参照個所に文献の番号を記載する。
  - (2) 各文献は、「著者名・編者名」「引用論文図書名」「出版社・発行地」「発行年」「ページ」を記載する。
  - (3) 欧文の場合、著者名は立体、書名は斜体にすること。
7. 表題等の文字の大きさは例文を参照すること。

### 編集委員（五十音順）

|       |                          |                         |
|-------|--------------------------|-------------------------|
| 委員長   | 勢力尚雅 (Nobumasa SEIRIKI)  |                         |
| 委員・幹事 | 中原明生 (Akio NAKAHARA)     |                         |
| 委員    | 郭 海燕 (Haiyan GUO)        | 北村勝朗 (Katsuro KITAMURA) |
|       | 小泉公志郎 (Koshiro KOIZUMI)  | 柴山英樹 (Hideki SHIBAYAMA) |
|       | 鈴木 孝 (Takashi SUZUKI)    | 山崎 晋 (Susumu YAMAZAKI)  |
| 事務局   | 杉友隆之 (Takayuki SUGITOMO) |                         |

### 一般教育教室彙報 第116号

発行日 令和7年4月30日  
 発行者 日本大学理工学部 一般教育教室  
 勢力尚雅  
 印刷者 日本フィニッシュ株式会社  
 高橋嘉久

BULLETIN  
OF  
DEPARTMENT OF GENERAL EDUCATION  
COLLEGE OF SCIENCE AND TECHNOLOGY  
NIHON UNIVERSITY  
No. 116

---

CONTENTS

**Articles**

Use of Text Analysis Method to Detect the Influences of Genesis in *Paradise*

*Lost* : Focusing on a Verb “Say” ..... Ryoko KATO ..... 1